

# タイルとホコラとツーリズム

キャラヴァン

## season 3 《白川道中膝栗毛》

2016年8月19日(金)-9月4日(日) 11:00~19:00 \* 月曜日お休み / 金曜日は20:00まで

出品作家 | 谷本 研 (たにもと・けん) / 中村 裕太 (なかむら・ゆうた)

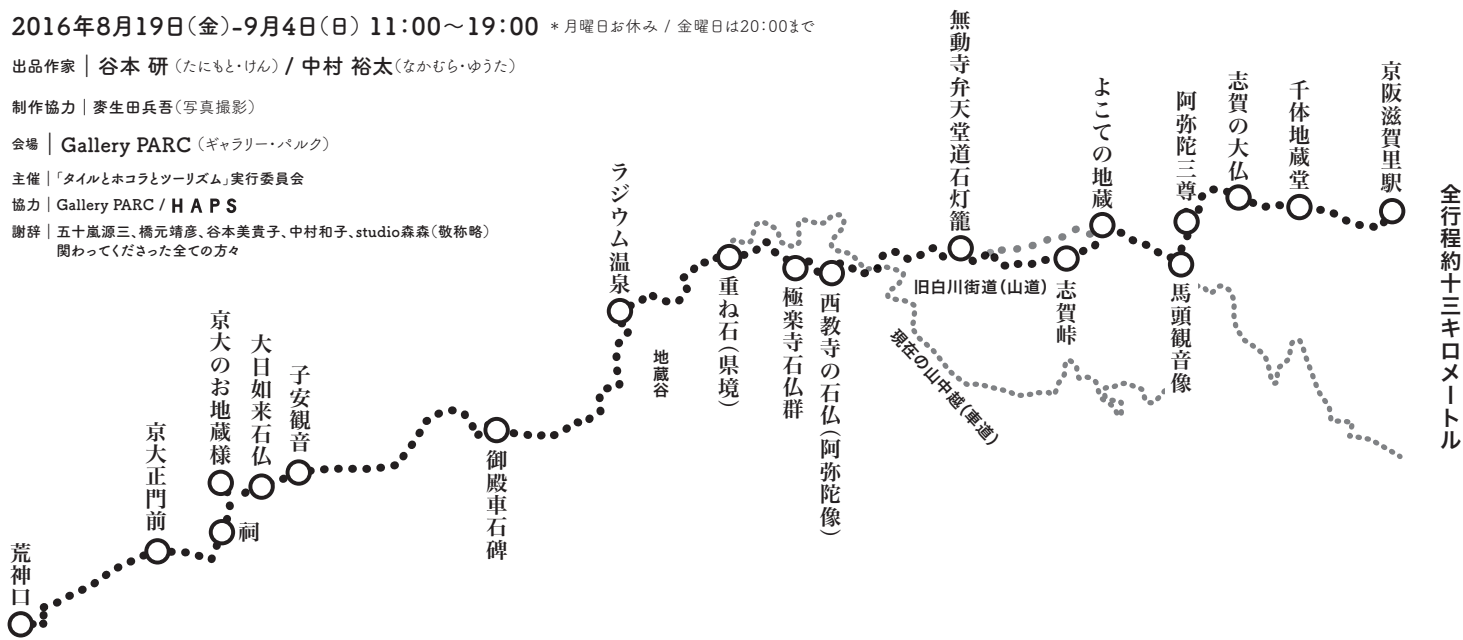
制作協力 | 麥生田兵吾 (写真撮影)

会場 | Gallery PARC (ギャラリー・パルク)

主催 | 「タイルとホコラとツーリズム」実行委員会

協力 | Gallery PARC / HAPS

謝辞 | 五十嵐源三、橋元靖彦、谷本美貴子、中村和子、studio森森(敬称略)  
関わってくださった全ての方々



### タイルとホコラとツーリズム season3 《白川道中膝栗毛》<sup>[註1]</sup>

2014年のお盆にギャラリー・パルクで開催した展覧会「タイルとホコラとツーリズム」は、谷本研<sup>[註2]</sup>と中村裕太<sup>[註3]</sup>の二人の美術家が、街で目にする地蔵菩薩や大日如来などのホコラ(路傍祠)の生態系に着目したもので、「ホコラ三十三所巡礼案内所」をイメージした会場には谷本研による《三十三所ミニホコラ》や、中村裕太による《納涼盆棚観光》などが展示されたほか、ホコラをめぐる『ホコラ三十三所巡礼ツアー』や『信仰を観光する』をテーマにトークセッションを開催しました。

この展覧会をきっかけに、本プロジェクトを5年間に渡って展開することを決めた二人は、翌2015年には「地蔵本」の出版を目標に掲げ、様々な資料・文献を集めた「タイルとホコラとツーリズム season2 《こちら地蔵本準備室》」を開催。会場はタイルとホコラにまつわる様々な資料や文献が集められた「ホコラテーク」に変貌。その他にも夜のホコラを巡る『タイルとホコラ・ナイトツアー』やトークセッション『屋根裏談義』などのイベントも開催しました。

そして、この資料収集の中で二人が出会った書籍に1959年に出版された『北白川子ども風土記』<sup>[註4]</sup>があります。これは、京都・北白川小学校の当時の児童たちが3年間かけて調べた郷土の文化・風俗・歴史をまとめたもので、当時においても全国的に注目され、1960年には短編劇映画としても公開されたものです。とりわけ谷本・中村は本書の「白川街道を歩いて」において、当時の織田少年が京都～大津を繋ぐ白川街道<sup>[註5]</sup>を実際に歩き、「蛇石」「蛇が壺」「重ね石」などと呼ばれているスポットを巡った取材記事に強い興味を持ちました。

タイルとホコラとツーリズムのseason3となる本展は、谷本・中村の二人が仔馬<sup>[註6]</sup>とともに、当時の織田少年の歩いた道のりをたどり、道中に出会うホコラに花を手向けながら、実際に白川街道を大津まで歩いた旅に端を発するものです。「重ね石」に見立てたスクリーンには旅の前半(左側:約10分)と後半(右側:約10分)の様子が映し出され、当日に使用された旅の行程表や、重ね石の前で食した昼食<sup>[註7]</sup>の弁当箱、仔馬の鞍などの「旅の記録」が展示されています。また、大津に到ってこの旅を終えた二人は、仔馬の鞍に残ったたくさんの栗毛を見て、ひとつの着想を得ました。それは中村が仔馬の栗毛で筆をつくり、谷本が大津絵<sup>[註8]</sup>にならった絵を描き、この「旅の記憶」を残す(うつす)ものをつくることでした。

本展は谷本・中村の「キャラヴァン」である《白川道中膝栗毛》の「記録と記憶」をご覧ください。また会期中にはイベント<sup>[註9]</sup>やワークショップ<sup>[註10]</sup>を開催いたします。ぜひご参加ください。

<sup>[註1]</sup> 膝栗毛 膝を栗毛の馬の代わりにして旅をすること。

<sup>[註2]</sup> 谷本 研 1973年神戸生まれ、滋賀在住。京都市立芸術大学大学院造形構想専攻修了。アートとその周縁に関わりながら企画活動を行う。主な展覧会に「デカダン秘宝館」(ギャラリーココ、1996)、「当世物見遊山」(お宿吉水、1999)など。2002年からは大津市仰木をフィールドに「地蔵プロジェクト」を展開中。デザインや漫画も手掛け、「プリコラージュ・アート・ナウ 日常の冒険者たち」(国立民族学博物館、2005)収録などに漫画を執筆。2014年には装丁を担当した「フランスの色景」(港千尋・三木学著/青幻舎)が出版された。観光ベナントの収集研究者としても知られる。

<sup>[註3]</sup> 中村 裕太 1983年東京都生まれ、京都府在住。2011年京都精華大学芸術研究科博士後課程修了。博士(芸術)。「民俗と建築にまつわる工芸」という視点からタイル、陶磁器などの理論と制作を行なう。最近の展示に「六本木クロッシング2013」(森美術館、2013)、「THE 8TH ASIAPACIFIC TRIENNIAL OF CONTEMPORARY ART」(クイーンズランド・アートギャラリー / プリスベン近代美術館、2015)、「20TH BIENNALE OF SYDNEY」(オーストラリア、2015)、「あいちトリエンナーレ2016」(愛知、2016)など。また工芸を作り手の視点から読み解き、その制作方法を探っていく(APP ARTS STUDIO)というプログラムを運営。

<sup>[註4]</sup> 『北白川子ども風土記』 1959年、山口書店 著者:北白川小学校、京都市立北白川小学校 編(カウンターに複写資料を用意してあります。)

<sup>[註5]</sup> 白川街道 古くは荒神口を起点に、今出川から北白川を経て大津市山中町に至り、田ノ谷峠を越えて南滋賀町・坂本に入る山道。平安以降は人馬の往来が多く洛中と近江を結ぶ要路。山中越・志賀越・白川越・今道越・安土海道とも。

<sup>[註6]</sup> 赤兎くん(ポニー・馬齢13歳・オス) 『三国志演義』に登場する赤兎馬(せきとば:「赤い毛色を持ち、兎のように素早い馬」の意)より命名とのこと。

<sup>[註7]</sup> 『北白川子ども風土記』の中で、実際に織田少年が重ね石の前で昼食をとっている様子が記されている。

<sup>[註8]</sup> 大津絵は、大津市で江戸時代初期から名産としてきた民俗絵画で、東海道を旅する旅人たちの土産物・護符として知られていた。神仏や人物、動物がユーモラスなタッチで描かれ、道歌が添えられている。当初は信仰の一環として描かれたものであったが、やがて世俗画へと転じたもので、松尾芭蕉の俳句「大津絵の筆のはじめは何佛」には、仏画が多かった初期の大津絵の特徴が表れている。

<sup>[註9]</sup> 「子どもと郷土—『北白川子ども風土記』を読む2」  
8月27日(土) 16:00~「予習会」/17:00~「トークセッション」  
『北白川子ども風土記』に興味を抱く研究者など、様々な視点を持つメンバーが集まり、生ビール片手に多角的にその魅力を語り合うおとな、研究会。本イベントは今年3月にHAPSスタジオにおいて開催した研究会に続く第2回目にあたります。(参加費:無料/ドリンク類は有料)

<sup>[註10]</sup> 「山中町・重ね石を訪ねる路線バスツアー」  
9月3日(土) 11:00~14:45頃  
白川街道のちょうど中央にあり、景境の印として大きな岩に磨崖仏が彫られた「重ね石」を路線バスを使って訪ねましょう。(参加費:無料。但し路線バス代として往復700円程度、弁当、飲み物、歩きやすい服装、雨具など必要)